

# News Letter

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所

## 大和・紀伊半島学研究所について【保 智己】

紀伊半島は周辺を海に囲まれ、また山から海までの間には高低差のある河川が多数存在します。これはまさに、日本の景観の縮図ともいえる地域です。また、紀伊半島は森林と河川により形成される景観だけでなく、日本古来の自然崇拜による神道と渡来してきた仏教が融合した独特な宗教観から形成された景観を持持ちます。入口に位置する奈良盆地然り、紀伊半島には日本列島の中でも古くから人間活動の痕跡が残されており、長い歴史の中で人と自然がさまざまな形で共生してきた土地であることが窺い知れます。このように、紀伊半島の自然は人の営みと密接な関係があるということがわかります。

これらの特徴に着目し、自然環境に人間活動がどのような形で影響を与えてきたのか、そしてそれが地域の文化とどのようなつながりを有してきたのかについて明らかにし、得られた成果から、今後我々がどのようにして自然と共生していくべきなのかを示したいと考えております。これらを達成するため、昨年度末に古代学・聖地学研究センター（旧 古代学学術研究センター）、なら学研究センター（旧 なら学プロジェクト）と共生科学研究センターが手を携え、大和・紀伊半島学研究所が設立されました。本研究所の目的である自然との共生というのは、「自然を守る」とことと「自然環境の有効利用」という、一見相反する課題でもあります。しかしながら、これまでの紀伊半島における人と自然との関わりや、それによって変化してきた自然環境を明らかにしていくことで、今後、人が自然との持続的な共生関係を樹立していく道筋をつけることが可能となるでしょう。それにより、環境保全だけでなく、持続可能な自然利用を元にした地域社会の活性化に繋がるのではないかと考えています。そのためには3センターの密な協力関係が不可欠です。

先日、記念すべき第1回目の大和・紀伊半島学研究所シンポジウムを、奈良県吉野郡大淀町と共同で開催しました。当初90名で参加者を募集したところ、参加希望者が多く、最終的に関係者も含め120名にまでなりました。これからも大和・紀伊半島学研究所として、紀伊半島の自治体との共同シンポジウムを計画していきます。また本研究所が様々な方々の研究の共同利用の場となるように努力していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



### TOPICS

- ・大和・紀伊半島学研究所シンポジウム報告
- ・研究会「うつほ物語と平安時代像」報告（古代）
- ・第13回若手研究者支援プログラム報告（古代）
- ・第12回都城制研究集会報告（古代）
- ・第14回若手研究者支援プログラム報告（古代）
- ・東吉野村野外体験実習報告（共生）
- ・第18回共生科学研究センターシンポ報告（共生）
- ・受章報告（共生）
- ・シンポジウム報告（なら）
- ・国際シンポジウム報告（なら）

## 大淀町×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウムの報告

2018年12月9日（日）に大和・紀伊半島学研究所として初めてのシンポジウムを、奈良県吉野郡大淀町との共催で「吉野・熊野をつないだ偉人 岸田日出男の遺したもの」と題し、吉野郡大淀町で開催しました。

同町出身で吉野郡役所の技手（技師）であった岸田日出男氏は、国立公園指定に関する文書や吉野地域を撮影した映画フィルム・植物標本など数多くの貴重な資料を残しており、今年初めに大淀町に寄贈されました。3千件を超す資料は整理が進められている途中です。また、岸田氏は吉野熊野国立公園の指定に多大な貢献を行ったことから「吉野熊野国立公園の父」とも呼ばれています。

前半は4件の講演で、池田淳氏（吉野歴史資料館長）から「紀伊山地の自然と人間」と題して紀伊半島の自然について講演がありました。続いての講演は、寺岡伸悟氏（奈良女子大学なら学研究センター長）から「大和・紀伊半島学からみた岸田日出男」と題する岸田氏ら紀伊半島に関わる研究者についての講演でした。休憩をはさみ、水谷知生氏（奈良県立大学教授）から「岸田日出男資料の整理を通して」と題して岸田氏の残した資料について講演があり、最後は柴田幹太氏（株式会社 IMAGICA Lab.）から「戦前の映画フィルムのココがすごい！」と題して古いフィルムの復元等について講演していただきました。

後半はパネルディスカッションが行われ、上記の講演者に加え大石正氏（奈良女子大学名誉教授、G&L共生研究所長）、西谷地晴美氏（奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所古代学・聖地学研究センター長）、森本仙介氏（奈良県教育委員会事務局文化財保存課）が、岸田氏が残した資料について議論を行い、会場に参加していた専門家から見解が示されるなどし、活発な意見交換が行われました。

当研究所では奈良盆地と紀伊半島について自然科学的研究、人文科学的調査研究、社会科学的研究といった多角的な視点から、環境・歴史・地域社会について総合的な研究を行うことで未来日本のあるべき姿を社会に発信することを目指しているとともに、研究機関に所属する研究者のみならず研究機関に所属せず研究を行う人たちを支援することも目的としています。

郷土研究者として幅広い交流関係の中で岸田氏が行った活動内容とその記録として残した資料は、まさに研究所の活動のあるべき姿として示唆に富むものであり、今回シンポジウムを開催したことで、研究所の目的を具体的な形として一般に公開できたことは大きな成果でありました。

なお、本シンポジウムは定員が90名でしたが、定員をはるかに超える応募があり、盛況に開催することができました。



パネルディスカッションの様子

### 【プログラム】

- 講演 1 「紀伊山地の自然と人間」  
講師 池田淳（吉野歴史資料館 館長）
- 講演 2 「大和・紀伊半島学からみた岸田日出男」  
講師 寺岡伸悟（奈良女子大学教授）
- 講演 3 「岸田日出男資料の整理を通して」  
講師 水谷知生（奈良県立大学教授）
- 講演 4 「戦前の映画フィルムのココがすごい！」  
講師 柴田幹太（IMAGICA Lab.）

### パネルディスカッション「岸田日出男から紀伊半島を深める」

- パネラー 池田淳（奈良県立大学教授）
- 大石正（奈良女子大学名誉教授・G&L共生研究所 所長）
- 柴田幹太（IMAGICA Lab.）
- 西谷地晴美（奈良女子大学教授）
- 水谷知生（奈良県立大学教授）
- 森本仙介（奈良県教育委員会文化財保存課）
- コーディネーター 寺岡伸悟（奈良女子大学教授）



## 古代 古代学・聖地学研究センターの紹介【西谷地 晴美】

これまでの古代学学術研究センターは、奈良女子大学に新設された大和・紀伊半島学研究所の内部センター化に伴い、センター名称を古代学・聖地学研究センターに変更いたしました。平城京や大和盆地に視点を据えながら、日本や東アジアにおける古代の歴史や文化を考えてきた従来の活動に加え、紀伊半島にも中核的視点の一つを据えることが必要となったためです。また、紀伊半島と大和盆地に共通する研究課題、対象が東アジアに拡大しても重要性が認識できる歴史的・文化的な研究課題として、新しく聖地学を立ち上げました。

今後は古代学に加え、聖地に関する既存の様々な研究成果を活用するだけでなく、地球温暖化が進行する現在をいわゆる人新世（Anthropocene）の時代と判断し、人新世にふさわしい新しい聖地学研究を行っていく所存です。



丹生川上神社



宇太水分神社

## 古代 研究会「うつほ物語と平安時代像」の報告【西村 さとみ】

本研究会は2017年12月16日（土）に、10世紀後半に創作された仮名書きの長編物語であるうつほ物語の考察を通して、古代から中世への転換期とされる平安時代がどのような時代であったのかを問いなおすことを目的として開催されました。

長田明日華（奈良女子大学大学院）による「うつほ物語の〈声〉」では、うつほ物語の主題と考えられる秘琴の伝授や音楽にまつわる挿話に語られる「声」が、身分を問わずそれを聞く人すべてを共感させるものとして描かれていることが明らかにされました。また、共感が成り立つ場面の考察から、上記の「声」にも通じる共感をもたらす言語表現として仮名文が要請されたのではないかと、その見解も示されました。

続く小菅真奈（奈良女子大学大学院）による「色彩表現の持つ意味 ―うつほ物語「国譲」巻を中心として―」では、うつほ物語を一つの画期として、複数の色を重ねることにより人物を表現するようになるなど、色彩表現の方法に変化が生じていることが論じられました。さらに、そうした色彩表現は「国譲」巻に特徴的に見られること、そこには「声」がもたらす共感にも通じる一体感が読み取れることが指摘されました。

かつて歴史学者 石母田正は、貴族とは価値観を異にするさまざまな階層の人びとを形象化したうつほ物語に当該期の時代精神を見だし、そうした諸階層の胎動を感じ取りながらも対処するすべを持ちえなかった貴族層の限界を論じました。しかし、二人の報告者により論じられたのは、うつほ物語が多様な階層の人びとの間に共感が成り立つ可能性を描き出そうとしていることでした。

それは、時代のいかなる課題とそれへの対処を表現しているのか。時代像の問いなおしにつながる意欲的な提言を受けて、史料の解釈から貴族層の思想の内実まで多岐にわたる活発な議論がおこなわれました。



## 古代 第13回若手研究者支援プログラムの報告

第13回若手研究者支援プログラムが2017年8月19日と20日の2日間にわたり、古代学学術研究センター（現：古代学・聖地学研究センター）主催、奈良県立万葉文化館及び科研費基盤B「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明」（代表：信州大学 西一夫）・科研費基盤C「日本古代における詩文表現の展開に関する基礎的研究」（代表：淑徳大学 白井伊津子）との共催で開催されました。2016年度に引き続き「漢字文化の受容」を大テーマに掲げ、「手紙を学ぶ、手紙に学ぶ」という観点から、日本と中国の手紙—現実に交わされた書状とその模範文例である書儀に着目し、それらの表現や形式を比較検討することを通して日本における漢字文化の受容のあり方を考察しました。第1日目は研究報告会と特別講義を行い、約60名の参加がありました。第2日目は公開講演会を行い、約60名の参加があり、両日合わせて、のべ約120名の参加となりました。報告集は2018年3月に刊行しました。



発表の様子

### 第1部 研究報告会・特別講義

8月19日（土） 於 奈良女子大学

#### 【研究報告】

大伴家持の和歌と書儀・書翰

報告者：奈良女子大学教授 奥村 和美

菅原道真の「状」と「書」と —「奉昭宣公書」を読む—

報告者：筑波大学教授 谷口 孝介

#### 【特別講義】

平安朝の漢文の手紙

講師：大阪大学名誉教授 後藤 昭雄

### 第2部 公開講演会

8月20日（日） 於 奈良県立万葉文化館

#### 【講演】

月儀と書儀 一書の文化と手紙の文学—

講師：愛知県立大学教授 丸山裕美子

手紙がひらいた書の文化 一木簡から紙へ—

講師：島根大学教授 福田 哲之

・質疑応答及び全体討議

司会：信州大学教授 西 一夫

## 古代 第12回都城制研究集会の報告【館野 和己】

今回で第12回目を迎えた都城制研究集会を2018年3月18日（日）に、「都城の災異と弱者」と題して開催しました。都城といえば、天皇や貴族たちが住む華やかな場所というイメージが強いでしょうが、そこも様々な災異—地震・台風・水害・疫病・飢饉などから逃れることはできませんでした。とりわけ天平9（737）年の天然痘の大流行が、平城京に大きな災厄をもたらしたことはよく知られています。災異の影響が老人・病人・身寄りのない人・貧者などの、社会的弱者に対して特に厳しいものとなることは、現代と共通します。そこで本研究集会では、特に平城京と平安京を取り上げ、都城における災異のあり様とその弱者への影響、それに対する公私の対策などを探り、古代都市の抱える問題点を浮き彫りにしたいと企画しました。

報告者と報告タイトルは右記の通りです。各報告を簡単に紹介しますと、館野報告は、平城京における災異の様相、救済策の問題点、弱者の特徴などを指摘して、シンポへの問題提起とし、吉野報告は宝亀4（773）年の賑給に関わる太政官符案を分析し、平城京における災害と公私の救済策の特徴・変化を探りました。神野報告は、天平9年の天然痘流行と平城京出土遺物（木簡・灯火器）の関連を追究するとともに、その後の祭祀具の変化にも注目し、村田報告は、『万葉集』の行路死人歌などから、王権の拡張に伴い、その外縁部へと放たれた新たな弱者＝中央官人の姿などを論じました。西村報告は、平安京における水害・地震・疫病と賑給・文殊会・疫神祭等を具体的に明らかにし、救済策の変化を探り、小檜山報告は、平安京左

京九条三坊で出土した施薬院関係の木簡から、そこに施薬院関係施設の存在した可能性を指摘しました。

報告終了後に、報告者同士で議論を展開しました。災害研究は阪神・淡路大震災、東日本大震災などの近年の経験から、その重要性が強く認識されるようになった研究分野です。都城におけるそれも、まだまだ深めていく必要があるでしょう。参加者は約80名でした。シンポジウム開催にあたっては、学内外の多くの研究者・機関のお世話になりました。深く感謝申し上げます。なお本研究集会の報告内容は、『都城制研究（13）』（2018年度刊行）に掲載の予定です。



会場の様子

#### 【報告】

都城における災異と弱者の救済 一問題提起として—  
平城京における災異と救済  
奈良時代の灯火器と燃灯供養  
—二条大路SD5100・5300出土灯明皿の分析を中心に—  
王権からの疎外と逃亡 一万葉歌に見る逸脱者—  
平安京の災異と救済  
平安京跡出土の施薬院関連木簡

: 舘野和己 (奈良女子大学)

: 吉野秋二 (京都産業大学)

: 神野 恵 (奈良文化財研究所)

: 村田右富実 (関西大学)

: 西村さとみ (奈良女子大学)

: 小檜山一良

(京都市埋蔵文化財研究所)

司会：前川佳代 (奈良女子大学)

## 古代

### 第14回若手研究者支援プログラムの報告【奥村 和美】

2018年度第14回若手研究者支援プログラムは、8月26日（日）・27日（月）に奈良女子大学にて開催されました。今回も、科学研究費基盤研究B「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明」（代表：信州大学 西一夫）及び科学研究費基盤研究C「日本古代における詩文表現の展開に関する基礎的研究」（代表：淑徳大学 白井伊津子）より共催を得ました。「仮名文字」をテーマに、万葉仮名と平仮名との、連続面と不連続面とを考察し、固有の文字を持たなかった古代日本人が、日本語を文字に書き表すために行った様々な工夫と格闘の跡をたどることを通して、日本における仮名文字の成立とその展開を史的に位置づけることを試みました。第1日目は公開講演会を行い、第2日目はシンポジウムを開催しました。両日合わせてのべ約140名の参加となりました。報告集は2019年3月に刊行の予定です。



会場の様子

#### 第1部 公開講演会

##### 【講演】

仮名の生育にみる美の様態

講師：東京学芸大学教授

萱のり子

新発見 山梨県甲州市ケカチ遺跡「和歌刻書土器」の歴史的意義

講師：人間文化研究機構 機構長

平川 南

#### 第2部 シンポジウム

##### 【研究報告】

〈訓字〉をとおしてみる上代の〈仮名〉

報告者：奈良女子大学准教授

尾山 慎

中国における仮借

報告者：漢検漢字文化研究所研究員

田中 郁也

古代の漢字字体からみた仮名

報告者：東大阪大学准教授

井上 幸

修辞と表記

報告者：淑徳大学教授

白井伊津子

コメンテーター：京都大学名誉教授 内田 賢徳

司会：奈良女子大学教授 奥村 和美

## 共生 共生科学研究センターの紹介

共生科学研究センターは、人間社会と自然環境の共生のための科学－共生科学－を通して、自然の保全と再生に資する研究を進めることを目的としています。現在、地球上では人間活動の急激な増大に伴う大量生産、大量消費、大量廃棄等が、温暖化、酸性雨、オゾンホール、産業廃棄物、生物種の絶滅、生態系の破壊などの重大な歪みをもたらし、大きな社会問題となっています。地球圏や生態系は、種々の要素が相互に関連しあって全体の系を構成しながら動いている複雑系であり、その理解には分析的な手法と総合的な手法の両面を取り入れた、物質から地球規模に至る多元的研究が要求されます。我々は、物質から生態系までを研究対象とし、奈良地域および紀伊半島を基点に、東アジア地域から全球的広がりを視野に入れ、自然環境と共存できる人間活動のあり方について、広く提言を行うことを目指しています。



我々は、物質から生態系までを研究対象とし、奈良地域および紀伊半島を基点に、東アジア地域から全球的広がりを視野に入れ、自然環境と共存できる人間活動のあり方について、広く提言を行うことを目指しています。

## 共生 東吉野村野外体験実習の報告

本センターが地域貢献事業の一つとして毎年、奈良県吉野郡東吉野村で実施している小中学生対象の野外体験実習を、2018年8月5日～6日に行いました。今年は、小学生38名、中学生2名、保護者3名のご参加をいただき、スタッフ12名を加えて、総勢55名で実習を行いました。

1日目は、(1)「川の生き物について学ぼう」、(2)「何でもかんでも燃やしてみよう」、(3)「動物の行動を観察してみよう」と題した3つの実習を行いました。(1)では、四郷川で水生昆虫や魚などの採集を行いました。川の流が速い所と遅い所で採集された生き物をバットの中で観察し、種類や形にどのような違いがあるのかを学びました。また、採集された生物のスケッチを行いました。(2)では、アルコールランプを使って、様々な金属を燃やす実験を行いました。通常、モノが燃える酸化反応には酸素が必要なので、マッチやろうそくは二酸化炭素中では燃えません。しかし、マグネシウムという金属は、燃えるときに二酸化炭素から酸素を奪って酸化されるので、二酸化炭素中でも激しく燃えるということを知りました。夕食後に実施した(3)では、ダンゴムシを迷路に入れて、右に曲がった後は左に曲がり、左に曲がった後は右に曲がる「交替制転向反応」と呼ばれる習性を観察しました。

2日目の「森作りについて学ぼう」では、朝から30分ほどかけて山登りをし、地元林業家の竹内信市さんに講師をお願いして、樹皮剥ぎと綱うちの体験をしました。また、今年も昨年に引き続き、昼食に流しそうめんをして頂き、流れてくるそうめんやミニトマトに歓声があがっていました。

実習参加者からは「生き物の住む所や体の違いが分かった」「ものの燃え方を見ることができて楽しかった」「虫の行動に法則性があるとは知らなかった」「林業への理解が体験を通して深まった」などの感想が聞かれました。



川の生物観察の様子



金属を燃やす実験の様子



迷路実験の様子



樹皮剥ぎ体験の様子



## 共生 第18回共生科学研究センターシンポジウムの報告

**第18回共生科学研究センター・第22回紀伊半島研究会シンポジウム**  
**紀伊半島の森里海生態系の再生**

日時：2019年1月12日（土）13:00-17:30（12:20 開場）  
場所：三重大学 環境・情報科学館3階（三重県津市東真町屋町1577）  
参加費：無料（申込不要）

**プログラム：**  
開会挨拶：相田 憲次（紀伊半島研究会会長）  
13:10-13:15 趣旨説明：松尾 奈緒子（三重大学）  
13:20-14:00 「紀伊半島のユニークな気候」立花 義裕（三重大学）  
14:00-14:40 「海跡湖須賀利大池の森林生態系の再生」平山 大輔（三重大学）  
14:40-14:50 休憩  
14:50-15:30 「回遊性魚類からみる森里海の連環」佐藤 拓哉（神戸大学）  
15:30-16:10 「有田川での森里海と人のつながりの再生の試み」徳地 直子（京都大学）  
16:10-16:20 休憩  
16:20-17:00 「干潟生態系の健康診断と再生」木村 妙子（三重大学）  
17:00-17:20 総合討論  
閉会挨拶：保 智己（奈良女子大学共生科学研究センター長）



共催：奈良女子大学共生科学研究センター 紀伊半島研究会  
三重大学生物資源学研究所

問い合わせ：紀伊半島研究会  
<http://kii-peninsula.sakura.ne.jp/top/>  
松尾奈緒子（三重大学）  
nakoi@mie-u.ac.jp

**シンポジウムのねらい：**

- わたしたちが暮らす紀伊半島にはユニークな生態系があります。
- シンポジウム第1部では、紀伊半島のユニークな生態系を形づくる大切な要因のひとつであるユニークな気候について概観した後、三重県尾鷲市にある国指定天然記念物の海跡湖・須賀利大池を囲む森林の現状と再生の試みについて話を聞きます。
- 第2部では和歌山県有田市における「在来の回遊魚が森里海をどうつないでいるのか」、「それを利用して森里海をつなぐ再生できるか」という取り組みについて話を聞きます。
- 第3部では森里海連環の最下流域である干潟生態系の現状と再生の試みについて話を聞きます。その後、全員で紀伊半島の森里海生態系のつながりと、それを再生するための人のつながりについて意見交換したいと思います。

**会場へのアクセス：** <http://www.mie-u.ac.jp/traffic/index.html>  
三重大学環境・情報科学館3階  
1. 近鉄/IR津駅から三交バス  
津駅前バス乗り場「4番」からバス（06, 40, 51, 52, 56, 53系統）に乗って「三重大学前」下車 ※バス停「大学病院」、「大学病院前」ではなく、「三重大学前」で下車し、正門からお越しください。  
2. 近鉄/IR津駅からタクシーで約10分  
3. 近鉄江戸橋駅から徒歩で15～20分

**三重大学キャンパスマップ：**



2019年1月12日（土）13時より、第18回共生科学研究センターシンポジウムが、三重大学 環境・情報科学館3階において開催されました。本シンポジウムは、紀伊半島研究会の第22回シンポジウムと、三重大学生物資源学研究所との共催によるもので、「紀伊半島の森里海生態系の再生」と題して、趣旨説明、5つの講演と総合討論がありました。

- 「趣旨説明」 松尾奈緒子（三重大学）  
「紀伊半島のユニークな気候」 立花義裕（三重大学）  
「海跡湖須賀利大池の森林生態系の再生」 平山大輔（三重大学）  
「回遊性魚類からみる森里海の連環」 佐藤拓哉（神戸大学）  
「有田川での森里海と人のつながりの再生の試み」 徳地直子（京都大学）  
「干潟生態系の健康診断と再生」 木村妙子（三重大学）

三重大学での開催ということもあり、三重県在住の方をはじめ、和歌山県、奈良県などから62名の参加がありました。

講演の中では、本州で一番の多雨地帯が紀伊半島南部であること、多雨になる理由と黒潮との関係について、国指定天然記念物である三重県尾鷲市の須賀利大池湖岸の常緑広葉樹が急激に枯死していることとその要因について、アマゴの生活史型（河川で一冬暮らすアマゴと川と海の間を回遊するアマゴ）と森・川・海とのつながりについてお話いただきました。続いて、森と川、海とのつながりのダムなどによる分断について、また豊かな水産物を育む干潟が約4割も失われていること、およびこれらの再生への試みについて話題提供をいただきました。

特に印象的であったのは、沿岸域の生物多様性と流域の環境要因との分析のために、研究者だけではなく一般の方々を巻き込んだ環境DNAの調査に関する話題についてです。河川の調査といっても支流まで含めると非常にたくさんあり、研究者だけではとても実施できず、かといって調査区を限ってしまえば正しい分析はできません。そのため、一般の方々にもサンプル採集を行ってもらい、そのサンプルと現場の緯度経度の情報、周りの環境がわかるような写真を研究者宛に発送してもらい、分析およびデータ解析を研究者が行うというものです。さらにサンプルが採取された場所をWeb上で公開することにより、同じ場所のサン

プルばかりが集まらないようにすることが可能であり、調査協力者にはまだサンプルが採取されていない場所に自分が最初に行きたいというモチベーションが生まれます。環境に興味がある方であれば、自分が調査に協力しているという満足感があります。紀伊半島の森里海生態系の保全に、自分ならどのようにかかわっていくことができるのかを考えるよい機会となりました。



会場の様子

## 共生 受章報告

東吉野村野外体験実習の「森づくりについて学ぼう」で毎年講師をしていただいている地元林業家の竹内信市さんが、平成30年秋の叙勲に際し、旭日単光章\*を受章されました。心よりお祝い申し上げます。

\* 国家または社会に対し、顕著な功績をあげた人が対象となる勲章の一つ



実習中の竹内氏

## なら なら学研究センターの紹介

なら学研究センターは、大和・紀伊半島地域について自然・歴史文化・現代社会の観点から総合的な研究を行う拠点として設立されました。同地域に蓄積された歴史・文化・自然・技術を再評価し、その地域に見合った課題解決・地域振興の手法を地域の人々と共に研究実践する文理融合型の学際的研究を行っているセンターです。

奈良を舞台の中心に据えながらも、多くの国内外の組織や人々と連携しながら、地域をベースにした社会技術と社会課題の解決に向けた議論や実践とそのモデル化を続けていきたいと考えています。



セミナーの様子



## なら シンポジウムの報告

なら学術センターは、国内外のネットワークづくりを平成30年度の重要な活動として位置づけています。そのため、国内ネットワークづくりのためのシンポジウムを2018年10月15日に開催しました。奈良女子大学佐保会館において、シンポジウム「地域の“いま”を知り、“これから”を描く。奥大和、島根で始まっていること」と題し、地元奈良県地域振興部南部東部振興事務所と共催しました。

少子高齢化による地域活力の衰退は中山間地域だけでなく、都市部にも及ぶ全国的課題となっています。しかしこうした課題に早くから直面していた中山間地域では、あたらしい試みや仕組みが生まれ始めています。こうした状況について最新の研究と実践をおこなっている島根県中山間地域研究センターの協力ののもと、新しい地域やソーシャルの仕組みを発信する雑誌『ソトコト』の指出編集長や、奈良県東吉野村のコ・ワーキングスペースや川上村の地域ビジネスの実践者に登壇していただきました。

当日は奈良県内外の自治体関係者、地域づくりに取り組む人々、また奈良女子大学なら学術センターと協力関係にある他大学の関係者ら120名が参加し、地方からの課題と可能性について熱のこもった議論を行いました。

第一部では、島根県中山間地域研究センター安部聖専門研究員による島根県における「小さな拠点づくり」についての講演が行われ、全県的かつ詳細な集落調査に基づいて行われた施策とその成果を講演していただきました。

第二部ではパネルディスカッションが行われ、まず新しい地域やソーシャルの仕組みを発信する『ソトコト』編集長指出一正氏による全国での取り組みについての概要を紹介していただきました。続いて、奥大和での特筆すべき2つの取り組み（東吉野村のオフィスキャンプ、川上村のかわかみらいふ）について、それぞれ坂本大佑氏、竹内満春氏から生き生きと現場の風景や思いの伝わる報告をしていただきました。その後、講演者奈良県南部東部振興課の福野次長によるコメントに続き、地方からの課題と可能性について熱のこもった議論が行われました。また神戸大学や島根大学、東京大学高齢社会研究機構などからもその実践についてパネル展示により紹介が行われました。



会場の様子

### プログラム

#### 【講演～いまを知る～】

「島根県の中山間地域における『小さな拠点づくり』等の取り組み」  
安部 聖 氏（島根県中山間地域研究センター専門研究員）  
司会：水垣 源太郎（奈良女子大学）

#### 【パネルディスカッション～これからを描く～】

パネラー 指出 一正 氏（月刊「ソトコト」編集長）  
坂本 大佑 氏（合同会社オフィスキャンプ代表社員）  
竹内 満春 氏（かわかみらいふ事務局長）  
コメンテーター 福野 博昭 氏（奈良県地域振興部次長）  
司会：寺岡 伸悟（奈良女子大学）

なら 国際シンポジウムの報告

2019年1月25日に国際シンポジウム「21世紀におけるコミュニティ、福祉、社会技術」を、世界遺産東大寺境内にある東大寺文化センターで開催しました。

SDGsに象徴される現代社会の様々な課題解決のためには、科学技術の導入や開発が不可欠ですが、世界各地にはその地域固有の文化・歴史・社会状況が存在し、それが一律に進まないこともあります。そのためには各地域の文化に根ざした社会技術の開発が求められています。高齢社会を中心的なテーマとし、現代社会の様々な課題解決のために科学技術の導入や開発が不可欠であるが、それをいかに各地の地域固有の文化・歴史・社会状況に根ざした社会技術の開発を行うか、というテーマで開催しました。科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）の研究助成を受け、国内（富山・東京・奈良）および海外（台湾・トルコ・バングラデシュ）から、公衆衛生看護学、老年工学、社会学、農業経済学、ジェンダー研究、情報理工学、文化人類学、さらに高齢者をステークホルダーとするベンチャー企業家など多彩なメンバーから講演をしていただきました。これだけ分野や立場の異なる報告者が揃いながら、話題は常に「社会・文化と技術」のあるべき姿へと収斂していくことが興味深く、最後の全体討論では、フロアからも熱のこもった質問が出され、それについて登壇者から次々と発言が続くシーンもみられるほどでした。

なら学研究センターでは、これからも多くの組織や人々と連携しながら、こうした社会技術と社会課題の解決に向けた議論や実践を続けていきたいと考えており、今回のシンポジウムが国際的なネットワークへと広がっていくことを約50人の参加者も確信して幕を閉じました。



国際シンポジウムの様子

<プログラム>

セッション1：現状と課題

司会：水垣 源太郎（奈良女子大学 社会学）

報告者：İsmail Tufan（トルコ アクデニズ大学 老年学）

「Technology and Society」

M. Saiful Islam（バングラデシュ ダッカ大学 人類学）

「Why Do Community Arsenic Mitigation Water Supply Technologies Fail in Rural Bangladesh? Exploring the Significance of Culture in Promoting Mitigation Technologies」

徐 業良（台湾 元智大学 老年工学）

「Gerontechnology: From research to daily applications」

セッション2：取組と展望

司会：寺岡 伸悟（奈良女子大学 社会学）

報告者：村上 育子（トルコ アクデニズ大学 老年学）

「高齢社会での人間関係のあり方に関する一考察：トルコと日本の比較から」

中林 美奈子（日本 富山大学 看護学）

「住民の力～富山発・ゆるくて楽しい歩行圏コミュニティづくり～」

後藤 学（日本 株式会社 Helte）

「ICTを活用した日本の高齢者と外国人学生との交流事業」

水垣 源太郎（日本 奈良女子大学 社会学）

「縮小社会においてコミュニティが役立つとき役に立たないとき」



## 研究所の活動状況（～2018年度）

### 地域貢献事業

- ◎小中学生対象「東吉野村野外体験実習」（共生）  
日時：2018年8月5日～6日実施

### シンポジウム等

- ◎第13回若手研究者支援プログラム（古代）

「漢字文化の受容」

第1部 研究報告会・特別講義

日時：2017年8月19日

場所：奈良女子大学

第2部 公開講演会

日時：2017年8月20日

場所：奈良県立万葉文化館

- ◎研究会（古代）

「うつほ物語と平安時代像」

日時：2017年12月16日

場所：奈良女子大学

- ◎第12回都城制研究集会（古代）

「都城の災異と弱者」

日時：2018年3月18日

場所：奈良女子大学

- ◎第14回若手研究者支援プログラム（古代）

「仮名文字 万葉仮名と平仮名」

第1部 研究報告会

日時：2018年8月26日

場所：奈良女子大学

第2部 シンポジウム

日時：2018年8月27日

場所：奈良女子大学

- ◎なら学研究センターシンポジウム（なら）

「地域の“いま”を知り、“これから”を描く！奥大和、島根で始まっていること」

日時：2018年10月15日

場所：奈良女子大学

- ◎大淀町×大和・紀伊半島学研究所連携シンポジウム

「吉野・熊野をつないだ偉人 岸田日出男の遺したもの」

日時：2018年12月9日

場所：大淀町文化会館（吉野郡大淀町桧垣本2090）

- ◎第18回奈良女子大学共生科学研究センターシンポジウム（共生）

「紀伊半島の森里海生態系の再生」

日時：2019年1月12日

場所：三重大学

- ◎国際シンポジウム（なら）

「Community, Welfare, Technology for Society in the 21st Century（21世紀におけるコミュニティ、福祉、社会技術）」

日時：2019年1月25日

場所：東大寺文化センター



## 研究所の活動状況（～2018年度） 続き

### シンポジウム等 続き

#### ◎第1回聖地学シンポジウム（古代）

「神々と自然と社会」

日時：2019年3月3日

場所：奈良女子大学

#### ◎第13回都城制研究集会（古代）

「東アジアの天下と都城—外交の場としての都城—」

日時：2019年3月16日

場所：奈良女子大学

### センター主催セミナー

#### ◎2018年度第1回（通算第18回）共生科学研究センター内セミナー

若林 智美（奈良女子大学理学系女性教育開発共同機構）

「ミヤコグサが維持する開花時期の種内多型と、適応遺伝子の検出～全ゲノム関連解析を使って～」

日時：2018年7月24日

場所：奈良女子大学

#### ◎2018年度第2回（通算第19回）共生科学研究センター内セミナー

田草川 真理（京都大学大学院理学系研究科）

安岡 法子（大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター）

日時：2019年3月20日

場所：奈良女子大学

### センター後援事業

#### ◎「生体内D-アミノ酸研究の最前線」（共生）

共催：奈良女子大学共生科学研究センター

日時：2018年8月30日

場所：奈良女子大学

#### ◎「天理環境フォーラム2018 ～私が考える「エコ・シティ」～」（共生）

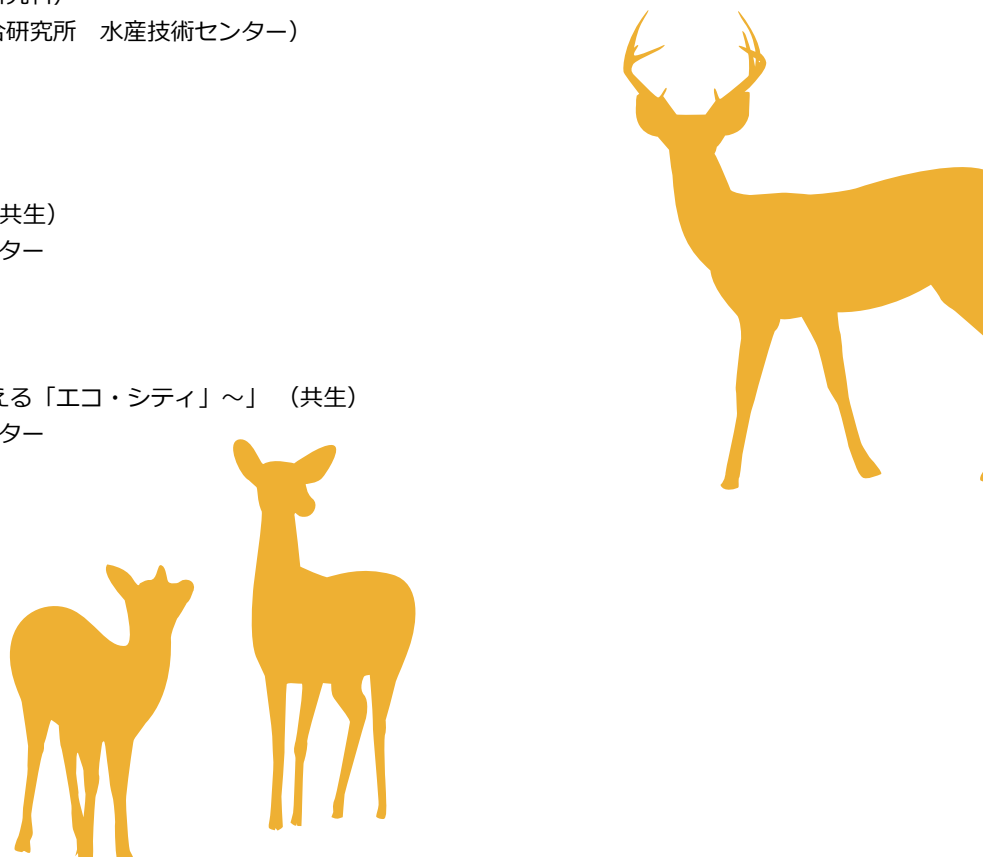
後援：奈良女子大学共生科学研究センター

日時：2018年10月5日～11月23日

場所：奈良県天理市

### 開講科目

- ・共生科学（共生）
- ・地域探求実践演習（共生）
- ・歴史学演習（古代）
- ・なら学（なら）



### 編集後記

2018年3月1日付で、共生科学研究センター、古代学学術研究センター改め古代学・聖地学研究センター、なら学プロジェクトから発展したなら学研究センターの3センターが統合して新たに大和・紀伊半島学研究所が設立されました。それぞれのセンターでもニューズレターを発行していましたが、今後は研究所として発行することになり、今回は記念すべき最初のニューズレターとなります。しばらくの間は試行錯誤を繰り返すことになるとは思いますが、皆様温かい目で見守ってください。（狩俣）

制作発行 奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所  
編集者 狩俣 順也 川根 昌子  
榎谷 けい子 大賀 克彦  
連絡先 〒630-8506 奈良市北魚屋東町  
Tel 0742-20-3762  
担当事務 研究協力課  
URL <http://www.nara-wu.ac.jp/kyi>  
E-mail [ky-i@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:ky-i@cc.nara-wu.ac.jp)